

尾張藩海防史料「赤心秘書」についての紹介・翻刻③

長 屋 隆 幸

はじめに

尾張藩海防史料「赤心秘書」巻二の目次から「士以上之輩武芸難行届候事」まで、およそ巻二の半分程度を翻刻した。今まで「尾張藩海防史料「赤心秘書」についての紹介・翻刻②」にも書いたように各条に解説をつけるべきと考えていた。しかし、私事などに追われて、ここ数年間翻刻を進めることもできなかったことから考えを改め、まず巻五までの翻刻を終えることを優先し、その後に各条の解説を行うように方針を改めることにした。ご了承いただきたい。なお、旧字・異体字は原則常用漢字に直した。また、合字は開いた。

翻刻

(表紙)

「赤心秘書」二

赤心秘書第二目録

- 一上野二王門焼失之節御道固仙台・彦根等武備心懸之事
- 一御家中之輩御旗本之ことくいさま敷風なく、シミたれ候事
- 一御家中へ御軍役之大事を申聞せたき事
- 一松平右近将監殿御郭内空虚ニ成御大事之旨仰之事
- 一当時ハ農兵ニも難成又難召抱置ニ付、其大概を申述候事

- 一御家中六分通り召仕御城下ニ差置、四分者百姓を用候事
- 一御家中他所者召抱候者非常之節無心元事
- 一御家中支配人等召抱不都合之事
- 一御家中無禄ニ而無之故、難儀之者有之事
- 一御家中現米取難儀之事
- 一士以上之輩武芸難行届候事
- 一御家中武備衰候事
- 一御治世久敷諸人奢侈困窮相成候事
- 一御下御門外御嚴重ニ無之事
- 一御門々々守り方ゆるかせニ候事
- 一東都二之丸火事之節松平丹波守殿御誉之事
- 一御当地ニ而も東武のことく従者御改之事
- 一御軍役人数召連候大概之事
- 一御家中御軍用ニ召連候人数毎歳書付ニ而申達候事
- 一御家中従者迄も譜代ニ召抱候様成風ニ仕度奉存候事

(朱書)

「上野二王門焼失之事、御奉書火消之事、本多中務殿・板倉内膳殿御道固之事、松平陸奥守殿武者踊之事、井伊掃部殿馬着到之事」
一肥後熊本細川越中守殿二者賢者と申程之御方ニ而、肥後国統治候故ニ御誉も有之候、然るに上野御火消被 仰付候処、及大火上野仁王門焼失いたし候、右之趣御老中御月番松平右近将監殿ニ御逢被成候而御直ニ

御達御座候処、右近将監殿仰二者仁王門江者御人数上り候哉、怪我人等も候哉之旨ニ候処、仁王門ハ高く人数も上りかたく、たとへ仁王門之屋根へ人数上ケ候而も中々働も不相成、其上人損し候而者不宜候故ニ人数も上不申候旨御答ニ候、右近将監殿仰二者、此儀者 上聞ニ難達存候、上野火消を被 仰付候事ハ多くの堂塔を焼失致間敷為ニ候、然るに仁王門之上へ人数等も上り不申、怪我人もなく、及焼失候事ハ火消を被

仰付候詮者無之候、せめて士分之者ニも壺兩人、軽き者ニも四五人も怪我人等有之上ニ、屋敷より人をおろし焼失之事ハ不及是非候へ共、ろく／＼防も不被致大切之仁王門焼失之事ハ心得違ニ候、其之様ニハ文事ハ候へ共、武備ニおいて、此弛之候様ニも存候旨仰ニ而、夫より大に越中守殿氣之毒被致、右近将監殿之親類之衆を被相頼段々之断ニ而漸々相濟申候、右近将監殿・秋元但馬守などハ有徳院様御見立之御老中ニ而、文武兼備之御衆ニ御座候、表向ニ而者左程之武備も御見せ不被成候へ共、内証之御武備ニおいてハ少も御油断無之、常々御手配行届居申候、享保年中ニ有徳院様御城入後者火事之御手当前々と違御嚴重ニ被

仰出之、大手方・桜田方両方へ人数召連被出候衆者御披之節之前後之御固めニ候、依之皆用具長持を為持、其内二者弓鉄炮其外武具ニ而御座候、或ハ方角火消と申候而其火事之方角之所之御門内へ相詰被申候、大名衆いく頭も御座候、是又火消之事ニあらず、火事に事寄せ盜賊共大勢徒党を結び、御郭内へも可入哉之御固めニ御座候、或ハ拾人火消等も何れも手早に馬ニ乗出られ候事を第一と致され候事ニ而、其大意ハ火事ニ非常之意をふくませ被置候事ニ承候、或者火事最中に御老中連名之奉書到来、及大火候間人数召連何御門辺へ可被出候旨申来候、其御請相認候内ニ供揃をいたし候而即刻出馬被致候事ニ候、是者無役之大名衆と

いへとも常々油断を為致間敷為之御事ニ而、是又火事ハ二段急応之事を諸大名衆へ御知らしめ被置候事ニ候、御郭内ハ勿論、御郭外ニ而も御城へ風筋悪敷候へハ御老中方御登城ニ候、御老中御登城被成候へ者大手より内々之御門々々其外殿中向夜中ニ而も昼之通ニ被成、御門ひらき面番に成候、御老中方御登城候へ者諸御門番之大名衆不残出馬被致候、其外ニ五ヶ所之火事と申候而、上野・増上寺・市ヶ谷・麴町・小石川、此方角之火事ハ遠く候而も御老中方御登城御座候故、御門番火消之大名衆ハ月番之御老中屋敷へ人を付置、御老中方之供揃を聞合、直ニ供揃致し出馬被致候、前々有徳院様葛^(機カ)□へ被為成候処、其日西北風強く本郷より出火ニ而及大火、還御御道筋へ一文字ニ火先可参様子ニ付、俄ニ本多中務大輔殿・板倉内膳正殿御道筋之御固め被 仰渡候処、本多殿ハ御奉書到来、直ニ中黒之馬印一本・鉄砲三十挺・馬上之士十騎程ニ而出馬被致、両国橋詰ニ鉄砲十五挺ツ、両方へひらけ馬印を立て平伏被致居候処、其方先之乗を致可申之旨 上意ニ而、中務殿御先乗、其跡ニ 上様御馬上、御馬之左右ハ皆本多之馬上之士、其前後火繩ニ火を付鉄炮を持、馬上之士ハ馬上ニ而鎗を持御供仕、還御被遊候、板倉殿も俄之事故所々聞合ニ手間取候而御道かため之御間ニ合不申候、不覚之御沙汰ニ相聞候、上々首尾合も不宜候由、御当地之御家中之内大身之衆中ハ此本多殿之如く急応之事被懸心、非常之御奉公差支なく被致候様仕度奉存候、当時之如く情^(機カ)□之風俗御家中染込候而ハ御軍用之事ハ物置地置之御用ニも難立、大勢之御家中^(トカ)午有御家中なきも同前ニ候、是ハ何□なれハ常々武備之節制なき故ニ候、其証拠ハ先達ても御宮之御供所火事之節も時刻ハ昼九ツ過之事ニ候処、諸御役人下火ニ成候迄独りも火場へ駆着候輩も無之、評定所よりハ四五町ハ有なしニ候、此上もなき御大

切之御場所ニ而、殊ニ御本丸江者直ニ御座候へ者、火事装束ニも何も不及、其形リニ而速ニ駈着不申候而ハ不相成事ニ候処、諸御役人火事沙汰を聞なから弁当をゆる／＼と給、迎を呼ニ遣し、夫より火場へ出候輩多く候、御役人火場へ出候内ニ鎮火いたし候、御宮と申御場所からと申、万一南風ニ而も烈敷候ハ、直ニ御本丸之御馬出へ火移可申候ニ昼之事其上風も無之候故ニ鎮火致候こと恐悦至極ニ候へ共、諸御役人拙速之事なくゆるかしく手おくれニ成候事歎敷御事ニ奉存候、是又実ニおもひ入て火事之御大事を申人もなく、定而火事之御場所火事之節之御法ハ可有之候へ共、常々怠り勝ニ成行候故ニ候、如此御城近く之火事ニハ重御役人方も小十人目付・御小人目付を被召連、取る物も取あへず御場所江御出御裁許なくては不相濟候、東都之日黒火事ニハ御老中方御徒目付・御小人目付御連被成候而、火消之大名衆も一緒ニ御差図御座候、御当地も東都之ことく手おくれなき様ニ仕度候、度々有之候火事之御手配さへも如此に候へハ、まして御軍用之事神速ニ間ニ合可申候哉、おもひやられ候、此通りに武備之節制薄らき御家中之輩心忝ニ致置候ハ、是より二十ケ年も過候ハ、武之おとろへ候事甚敷相成可申候、武之衰へ候時ならてハ盜賊ハ発らぬ者なれハ、御家中之武之鋒先之にふり不申候様ニ度々御研立有之候様奉祈候、諸国共二年々と困窮ニ相成候へは諸事所ハ困兵之姿ニ成可申候、諸国困窮ニなれば自然と盜賊多ニ成候而賊兵起り候故ニ困兵賊兵は同じ事ニ候、盜賊之張本も致候者ハ名将之器量備る事なれば、此事を常々被考置たき儀に奉存候、此故に古之名将も不時に人数之着到を被見候事ハ非常之事を諸家中ニ油断いたさず間敷為ニ候、今も古き家筋之大名衆ニ者此事も有之、松平陸奥守殿ニハ武者踊と名付申候而俄触ニ而武者踊候間、只今可罷出と申触候へは直ニ具足着用乗馬

にて罷出、或輪乗隊伍を立候事其時之好ニよる事之由、或井伊掃部頭殿ニハ五拾石取候士より馬持ニ而、彦根ニ而馬之着到有之、一月ニ三度程ツ、家中之乗馬城之櫓之前へ乗出候而帳面ニ付、火事之節も其頭々之宅へ組之輩何れも馬上ニ而乗付、頭之下知を承候事之由、足輕ハ在所ニ而も江戸ニ而も暮六ツを打候へハ一組之足輕小頭之前へ出、鉄炮之素様をいたし、五ツを打候迄一時之間鉄炮をため、夫より休息為致、如此仕くせを付候事にて、右之武者踊も馬之着到も非常之事を常々能々色々之名を付いたし置候事にて、自と武具馬具に至る迄心懸不申候而ハ難相成候

(朱書)

「御家中之輩御旗本之ことくいさま敷風なく万事ニ付しミたれ候事」
 一他所ニ而ハ或ハ遠国江使、又は六ヶ敷御用等、或ハ急ニ他国へ之使等を相勤候事を誉れと仕、右様成節即刻打立可申心得をいたし、具足其外迄も貫目迄も積り立、非常之御用を心懸候事ニ候処、御当地ニおいてハ遠国江之御使ニ而も当り候趣も候へは引籠、何ぞ物入候御用等も当るへき事も候へは、あれ是と申立一寸のかれに仕候事一統に相成候、畢竟武之心懸薄きより如此相成申候、侍ハ六ヶ敷御用を相勤其身代不相応なる勤も存候事本意ニ候処、御家中不殘武之鋒先くしけ候而、御軍用ハ物置地並の御用ニも立ぬ様ニ相成候、とかく御役金を出しさへすれハ寐て居ても済と心得候輩多く候、於武道忌々敷候、千石取之御役米代百七・八十石ニ候、左候ハ、夫程之御軍役ハ猶子^{有金}ニ而も殘八百石程之御軍役は急度心得ねはなり不申候、然ニ千石ニ而弐百石之ミ之御役金を出して其千石之高不殘軍役心得不申候而も宜敷様ニも存候輩無勿体事ニ存候、如此事ハ重役人方より急度被仰渡之なき故ニ候、其源ハあまり御家中へ御愛憐過候故

ニ、夫ニあまへ申候様ニ成行申候、孫子地形之篇ニ愛して令する事不能、厚して使ふこと不能、乱るれとも治る事不能、譬は驕子のごとし不可用と有之候、当時の御家中之風俗大身小身共ニいたし様之なき事ニ相成候、是者外ニ致方ハ有之間敷候、重御役人ニ武備司候人を被 仰付、武之節制を強くして、齋之管仲がことく礼義廉恥を以て、士之恥を知らしむる之外ハ有之間敷候、御旗本衆と違ひ御家中ハ士之恥となる事を知らぬ故に、年始ニハ玄関ニ大文字之張札を出し、玄関をメ切、拙者儀勝手至而困窮故ニ何ケ年之間厳敷致儉約候、依之年頭暑寒ともニ預御出候而も右之御返礼ニも不致参上、無人故ニ御返礼之使等も進し不申候など、書付出し候、御旗本衆ニ者曾而無之候事ニ候、また右之事実ニ候へ者尤ニも候へとも、内証ニ立入候へは夫程ニハ無之候、表向如此ニいたし内輪ハ存外ニ候、土道ニおいて如此事ハ誠ニ歎敷仕方ニ被存候、譬実ニ勝手極々困窮ニ而茂天下之御旗本衆之ことく表向を張、年始五節句ニ者其高相応ニ行列を立ていさましく登城も可致処、武之鋒先にぶり候而其格式よりハ減格を致し候事宜敷様ニ相成候、是又武道ニおいてハ好候事ニも不承候

(朱書)

「御家中へ御軍役之大事を申聞せたき事」

一御軍役之事ハ委敷不被仰出候而者宜しからず候、異国にてハ天子を万乗之君とも奉申上、異変ニハ車万乗出候、諸侯を千乗、大夫を百乗と申候事ハ皆其封内之広狭ニよりにて車之数之多少定候事ニ而建国之大制に候、和国ニ而も 公義御軍役之御定も有之候、是も日本国之知行高ニて軍役を出す時ハ六十六ヶ国概^{ナラシ}ニして、壹国ニ五千騎と見、三十三万騎ニ候、日本之知行方式千万石を三十三万騎ニ割ハ、壹騎ニ六拾石め当り候、此割ニ而六百石より兵賦拾人、六千

石ニ而百人、六万石ニ而千人、六拾万石ニ而万人、此割ニ而者千石拾六人、万石百六拾人程ニなる也、令之義解二十人を一火と定、中国ハ奥州向と違、馬も少く候へ者、火長計^{カシラ}を馬上ニ仕立るとも有之候、今之御軍役之大概一万石馬上拾六騎、歩卒百六・七十人程之積りも無理成軍役ニ而者無之候、御軍用を相勤候輩とかく備立之利害耳申候趣ニ承申候、迎も備と申ものハ座席之上之了簡ニ而者難成事ニ而、其所之地形ニよりにて様々ニ候へは、夫よりハ先御家中之従者之御定を急度被仰渡候方ニ候哉、兼而従者之御定等も可有之候へ共、年を経候而者自ら其事を怠り勝ニ相成候て、知行ハ何之為ニ被下候哉知らぬ衆多く可有之候、日本国中之兵賦之事ハ將軍之御事ニ而候故ニ、東都ニ而者毎歳諸諸大名之土帳御改有之候、左候へハ御家ニ而も東武之ことく御家中之召仕之者譜代一季居迄も御吟味有へき儀ニ奉存候、凡日本国中之軍兵三拾三万騎を減し不申候様御備被成、異国之為ニ扶桑国を不被奪候事ハ征夷將軍之此事ハ重き御役めニ候、左候へ者国主も領主小身之輩も知行を取候面々ハ其知行所々地より出る兵賦なれば、外之事ハともかく候も、常に急度不守候而者難成候、然るニ難有久々打続たる御治世なれば、其事ハ忘れ果て居る輩多く候、是は重き御役人より能其事を知らしめ常ニ心掛置せずしてハ難成事ニ奉存候、公義ニ而も御家ニ而も御役儀ニ而も被 仰付、是迄之持高ニ而者難相勤候故ニ御足高或御加増被下候、此故ニ心得違候へハ只其御役儀ニ付物入多く候故ニ御足高・御加増被下候事ニも申なく候、是も其利も候へ共、左ニ者あらず、重御役人被仰付候へハ其人を大切ニ守護可致為ニ常平生も供廻りも増、軍事ニ召連候人数を増而討死之なき様ニ守護さすへきの為ニ御加増ヲ被下候て兵賦を増候事ニ候、其勤之物入と思ふ事大き成間違ニ候、此故ニ東都ニ而者大名衆者不及申

上、御旗本衆も御家の様ニ減格被致候衆者無之候、其高相応ニ召仕候侍・中間等も抱置キ、奥向之事ハ至而手輕ニ被致候、是誠ニ非常之心懸有故ニ候へとも、御当地之儀ハ知行高不相応ニ人数を減、私之奉存候人ニ千四五百石取候輩にて役人壱人・若党壱人・中間二人都而男たる者四人ニ而、召仕之女者十三人有之候、ケ様成儀者は何故なれハ前々申上候兵賦之事急度被仰渡其分限より召仕之者を減し候事ハ恥之様ニ存候風俗ニ不被成候而者相成申間敷候、近年ハ減格にいたし候事を晴之様相成申候、是程恥なる事ハ無之候、戦国之諺ニ武士ハ食ねと高楊枝と申たとへ事有之候、是ハ何程困窮ニ而も表を張、其分限之格式をおとさぬ事ニ候、然るに前ニ申上候通りにて是よりも年々如此減格之事諸行物ニ成候而者、御家中之従者ハ昔之十か一二も有間敷奉存候、当時御役にて相勤られ候面々ニ者少人も候へども、其余ハ前ニ申上候通千五百石程ニ而も支配人壱人・若党壱人・中間二人之類多く候、けしからぬ御減格など、申候へ者、御役金を出し候遊ひ人ニ候得者、何程減候而も申分者急度有之など、答申候、千五百石之御役米代金九十兩ほとに候へ者、是を高ニ積り候へ者式百五十石ニ当り候、左候へ者千五百取之輩ハ千式百五十石之軍役を常ニ心懸候而宜敷候、前二者御当家ハ御国ニ而ハ式本道具御持せニ而、万石以上之方ニハ先挾箱ニ而歩行之牽馬も大概東都之万石程之供廻りニ候、其外に其高ニ相応之供立にて大身之衆中ハ御旗本衆ニ准て供立も有之、小身之面々迎も相応ニ供廻り等も御座候処、減格ニ相成見苦敷候、前々ハ御国御用人ニ而歩行式人駕籠ニ而登城之由、ケ様成事も無余儀御儀故ニ候へ共、減格ニ而供立等少く相成候事ハ武之道ニおいて申上候ハ、宜敷事ニもあらず奉存候、此減格之被仰出より御家中之従者殊之外ニ減申候、右ニ付而者御郭内も自と空虚ニ相成候

而非常之時之御手当も難相成奉存候、城之外に屋敷を割候事ハ其城之膚^{ハタヘ}を為見間敷之為之外圍ニ候、畢竟城ニ衣装を為着候心得にて候故ニ、城計ニ而城外ニ屋鋪割之なきを裸城と申候、是又重々之曲尺にて本城を二・三之郭にて包ミ廻し、其外ハ土屋鋪ニ而包、又其通りニ懸廻し之土居・堀を掘て、又其外ニも土屋敷を割る事ハ重々城を包ミ廻し守るの意ニ候、此城を包ミ廻したる土屋鋪ニ陪卒之なき時ハ城外ニ土屋敷割たる詮も無之候、右之事も井田法ニ而、中公田を取、八方を私田ニ而取廻したるがごとくニ候

(朱書)

「松平右近将監殿御郭内空虚ニ成御大事之旨仰之事」
 一前々東都目黒行人坂より出火、及大火候而、西丸下より大名小路残なく類焼、桜田御櫓も御焼失ニ候、然る処其時之御老中松平右近将監殿ニ而万事御差因ニ候処、戸田采女正殿ニハ右近将監殿之御二男ニ候処、屋敷焼失之翌日右近将監殿より采女正殿ニ急ニ御逢被成度旨申參、箱崎中屋敷江被退居候ニ付早速參られ候処、右近将監殿仰ニ者今日中呉服橋内之上屋敷江御引移候様との御事ニ候、采女正殿御答ニ者いま屋鋪外之板圍も出来不仕、炭^炭も取片付不申候へ者中々今日中ニ引越候事者物置急ニ引越候事ハ相成間敷候、随分為急仮屋にて出来為致引越可申候旨御申候処、右近将監殿仰ニ者、夫ハ上の御大事を不被存故ニ候、諸大名御郭内御城近くニ屋鋪を被下候事ハ全以非常之御備ニ候処、今般之大火ニ而屋敷々々皆類焼故ニ何れも中屋敷或下屋敷へ被退候故ニ御郭内空虚ニ成候、享保年中ニハ此事格別ニ御念も入候、国持衆ハとも角も御譜代家においてハケ様之節之御備ニ候へ者、外之衆ニハ不拘其元ニハ焼跡ニ幕張被致今晚中ニ被引移可鎮候旨御申ニ而、無

是非炭を少し除、幕を張候而野陣之如くニ而被引移、翌日采女殿右近殿へ御逢、昨夜中幕張をいたし引移候旨被仰上候処、其節右近将監殿仰二者、大名屋鋪一軒・二軒焼失候而者外之屋敷多き故ニ下屋敷・中屋敷之御城遠之処へ被引越候而も御固メ筋之さしさわりにも不相成候へとも、今般之如く大名屋敷不残焼失ニ而何れも下屋鋪・中屋敷ニ罷在候故ニ御大切之御郭内ニ大名壹人も無之候、重而も如此事有之候ハ、中屋敷・下屋敷江退不被申、直ニ焼跡ニ野陣を張れ、上之御大事を可被心懸、享保之頃ハ国持衆ニハ其御沙汰も無之候へ共、御譜代衆ハ御郭内之上屋敷何程手狭ニ而も家来之者を下屋敷・中屋鋪ニ差置候事ハ難成候、是は非常之御用心ニ候、此事ハ今時は存候人も無之候、先早く被引移て御備ニも相成候由被申候、此事を諸大名衆被聞、夫より三日之内ニ不残御郭内之上屋敷へ皆々引移被申候、公義非常之御備如此ニ候

(朱書)

「当時は農兵ニも難成又屋鋪ニても相応ニ召抱置かたく候処ニ其大概をたゝ申候事」

一太宰弥右衛門か書ニ天地生々之利ニ而昔よりハ人も馬も多くなるへきに、兵之數計次第ニ減する事怪しむへきに以て実ハいはれ有事なり、兵法を講する者此事を知らずんハ有へからすと有之候、是ハ農兵と今御姿との分ニて申せし事ニ候、往古之ごとく武士知行所ニ居住して其田地を耕作すれハ百石之地ニ而も作男之五・六人もなくてハならず、馬も持ねはならず候故ニ、異変ニなれハ百石ニて五・六人も連して出らるれ共、今時は武士城下ニ居住する故ニ其事ならず、軍事ニ者其知行所之百姓兵賦ニ用る事本意ニ而候へ共、昔之通農兵ニ而武士其知行所ニ住て、手百姓も其所ニ住て譜代者ニ召仕、主従之間一入親ミも有之、軍用ニ者至極ニ能事なれ共、武士は城下ニ住、百姓ハ其知

行所ニ居る故ニ其親ミもなく、年貢之取立之事ニ付而者地頭と百姓との間出来いたし、取ろふの出すまいと申張る故、表向ハ地頭手百姓故ニ親みも有様なれとも、内証ハあた・かたきの様ニ申し候、此故ニ今時之百姓ハ軍用ニ無心元候、又当地知行取之輩地頭も軍事之咄ニなれば知行所之百姓を召連ると申候へとも、遠国より来る敵ニてゆる／＼と用意之なる敵ならハ知行所へも申遣して間ニ合けれ共、急なる事ニなりてハ間ニ合不申候、此故ニ当時士之城下住居ニて軍用に召連候若党・中間、其上ニ又知行所之百姓もくはへて其城下ニも急応之なり候程ニ人を置へき事ならてハ急軍之間ニも不合、或前ニ申上候様ニ城下ニ士屋鋪を割渡しても召仕少ければ盜賊俄ニ御城下御郭内へ押込候時は難防候、此致方ハ百一之法と申事宜敷よし、先師申聞候

(朱書)

「御家中六分通召仕御城下ニ差置、四分者知行所之百姓を用候事」

一日本国之兵三十三万へ貳千万石を割れハ高六拾石めニ一人ニ相成候、百石之田地に壹人出シ候、兵賦六分程の積ニ相成、千石ニ拾六人、万石ニ百六拾人程ニ候、然るに武士御城下ニ居住する故ニ其城下ニも相応ニ召仕之者差置不申候而ハ急なる時の間ニ合不申候、此故ニ知行百石取候者ハ召仕之中間壹人、貳百石ハ貳人、三百石ハ三人、四百石ハ四人、五百石ハ五人、六百石ハ六人、七百石ハ七人、八百石ハ八人、九百石ハ九人、千石ハ十人、万石ハ百人、何れも百石ニ一人ッ、召仕候事を法といたし候、是を六分役と申候而、常々軍役之人拾之内六分を常々屋鋪々々ニ召抱差置、急軍或急なる御使有て手人数ニ而出らるゝ様ニいたし、残四分を知行所之百姓を召連候心得ニいたし置候へ者、御城下ニ人も多く、只今之様ニ女計多く召仕、武用ニ立候男無之事

ハ有間敷候、此小割之内輪之事を不致、只御備之事を色々と申募候へとも急軍之時之用ニ不立、兼て出張ニ調置候ハ、皆雇人故ニ其時に至り一人も参不申事故ニ、忒百石・三百石乃至四・五百石ニ而も大方其身と鎧壺本なるへく候、片口・鎧一本ニ而も壺騎ニ而ハ候へ共、余り歎ケ敷事ニ候、西国三拾三国之御手受之御場所ニ而、天下之御前備とも他国ニ而ハ申候程なる御城下より出候御人数に右之様成事出来いたし候而ハ御外聞も不立、具常々御心懸薄き様ニも可存候、出張之事ハ何之御為ニ候哉、異国船ニ而も参り候ハ、実ニ急ニ御人数を御出し可被成御調ニ候、大きく申上候ハ、扶桑国を異国之為ニ不被奪候事之根本ニ而、第一ニハ京都、第二ニハ將軍家江之御奉公之最上ニ奉存候、然る二前ニ申上候如く懦弱にて外見計ニ而実のなき御人数調ニ成候哉、実之間ニ合候様ニ重御役人方も思召候事奉恐懼候、享保之頃より後ハ軍学を精進すると申候て何事も独して行届候様ニ積り立候事ニ候、今時精進と申候へは魚鳥を不食事之様ニ成候へとも、精進之文字ハくはしくす、むニ而、軍事之事ハ鎖細成事迄もくはしく不致候而ハ難成候、然るに物事大粗めに成候而難行届候、其難行届事ハ御軍用を相勤候者共実ニ身を入候事もなく未熟なる故ニ候、漢^{カフ}之人の申候ニ一度軍を出し候へハ髪白くなると申候事有之候、此言は能々せつなき事故ニかくは申せしと相見候、或前ニ申上候衛之靈公不道なれ共、王孫賈といふもの軍旅を司候故ニ他国より之軍も来らず候事、聖人之御言葉なれハ此軍旅を治ると仰の治りたるいたし方ハ容易之事ニ而ハ有之間敷候、聖人も国之大事ハ祀と戒とニ有とも仰御座候、其火事之儀を粗々敷成候ハ重御役人方ニ軍事ニ御身を入られ候方無之候故ニ候、御軍用を相勤候者も兵ハ国之大事と孫子か申候事を実ニ思ひ入不申候故、出張の事も皆真似事ニ成申候

(朱書)

「御家中近頃者他国者召抱候様ニ成候、非常之御用ハ他所者ハ無心元事」
 一可相成事ニ候ハ、願くハ御家中之陪卒も自分之知行所之百姓之ニ男・三男を其屋鋪へ呼、召仕置、武芸ニ而も仕込候へハ、譜代故ニ軍用ニも立可申候、若知行所ニ無之候ハ、御領分之者を召抱置候ハ、用ニも可立候、他領・他国之者を召抱候事急度御制禁ニ相成候ハ、宜敷候、自分之知行所之百姓ハ勿論之儀、御領分之者なれハ別に請人を立候ニも不及、其村之庄屋印形ニ而相濟候、若御法度を背き不埒之儀有之候へハ其庄屋へ引渡し候而宜敷候、西国向ハ皆其領分之百姓を召仕にいたし、他所者を不入、若取逃欠落致候者ハ其主人見合次第打捨候法故ニ不埒を致候小者など曾而無之候、軽き者ハ嚴敷法無之候而者逃走事多く相成候、他所者者請人なく候而も其請人と申も不慥候、御領分之者ハ其村ニ親兄弟も候へハ是程慥成人質ハ無之、軍用ニ召連候者ハ如此根のかたき者ならてハ不召れ候事に候、事之無之時ハ他所者とても左迄害ニも成間敷候へとも、異変ニ成候而者如何様成間者なるも難計候へハ、常々事なき時より此心得をいたし置度候、大身之輩ハ勿論、小身なる二百石・三百石程取候者も譜代之者有之候事を其家之飾と心得候風俗ニ致度物ニ奉存候

(朱書)

「御家中支配人等召抱不都合之事」
 一御家中小身之輩者支配人を召抱、忒・三年も知行所支配為致、其上ニ町方・在方より金銀等借入させ候而、鎖細成事を咎候而、其者を暇ニいたし金銀を追なく候事御家中一統ニ成候、右故ニ支配人ニ濟候者も其事兼而合点ニ而奉公ニ濟候事故ニ、実ニ主人之為ニ遠き慮りを仕候者ハ無之候而、主人之物を利ニ利を付て己か方へ引込候故ニ、

主人八年々こと困窮ニ成、支配人ハ次第ニ富候、此故ニ支配人を暇ニ致事主人も心勞もなく暇成申候、支配人も其事を苦ニも不仕、又外之屋鋪へ出て奉公をいたし、又如此致し候、故ニ如斯不宜風儀相止譜代に召抱おき候而格別之事無之候ハ、暇ニも不仕、支配人も代々相勤候様ニ仕くせを付候ハ、右之様成主人も召仕も不都合有之間鋪候、御家中年々と勝手向及困窮候儀ハ、其主人之無益之物好多く何事も質素之風俗を取失ひ奢侈ニ成候と、支配人之一季居同様之心根ニ而行先之事ニ者目も付不申、只当分送りニいたし信実之心なきとの二ツニ候、東都御旗本衆などニハ如斯事ハ先は無之、其高相応ニハ急度従者も有之、一季居候者も被召抱候へ共、五年無難ニ勤候へは六年目ニハ譜代と申名を付、一季居とハ格別ニ被致候故ニ勤る者も張合も有之候、御当地多く之御家中ニ候へ共、八分通りハ右之通ニ候へハ、此風俗を御直し被成候御工夫無之候而者御軍用も御手薄ニ可有之候、生死之場ニ至り候而者誰か陪卒御用ニ可立も難計事なれば、従者ニ至る迄常ニ遂御吟味御念を入被置候事 上之御為ニ奉存候、誰も申候、信州川中島之軍ニ信玄之備五町程崩れ立既ニ危く見ゆる所ニ、小荷駄付之中間小荷駄ニ附たる竹鎧を切解謙信之馬を突故ニ馬きかれて信玄危き命を助られ候類に候へは、前に申上通軍事はくわしく仕置たき御儀ニ候、御家中之輩御軍用之大事を奉存候ハ、召つかひ之者も譜代之者第一に心得候方ニも奉存候、其次にハ知行所之百姓より召仕候輩宜敷候、其次は一季居にても其分限を知りて其高相応ニ急なる御用之相勤候様ニ心得候輩宜敷候、御知行を被下候事ハ非常之御用之為ニ候へ者、無役ニ而御役米を出し候而も相応之御用ニ立候程召仕等も屋敷ニ差置候而、急事之御間ニ合候心得第一ニ而可有之候ニ、其心得無之油断多く陪卒を法外ニ減候事ハ急度御吟味有度儀ニ奉存候、

千石も貳千石も頂戴致従者も召抱不申、自分之心俣ニおこりを極め、安閑ニ暮候事ハ誰も致度物ニ候へ共、夫を致させぬ様ニ其筋々より吟味を致候而、軍用之節制と申候、節制とハ程能しめくゝりをして、ゆるかせにならぬ様ニいたし候事ニ候

(朱書)

「御家中世禄ニ而無之故難儀之者有之事」

一御家中之従者譜代之者無之候ハ、大名衆并山村・千村之外ハ世禄ニ而無之故ニ候、寺尾殿も昔ハ壹万石之由ニ候へ共、当時千石余、山中市正殿も四千石ニ而御老中之由ニ候へ共、当時百五十石ニ御座候、成程浮沈之御座候も諸人励ニも相成申候得共、乍然武備ニおいてハ不好事ニ承申候、畢竟生死之場になりてハ常々之恩ニ感し身命捨而働く事なくてハ実用無之候、先祖より代々御恩を奉蒙候者ハ何程難戦ニ成候而も二心を生し可申事ハ先は無之候、是何故なれば譜代者故ニ候、御当地之御老中方三千石之跡式養子なれば五百石之減少ニ成候而貳千五百石に立申候、是程減少ニ而ハ乍氣之毒と是迄之召仕も暇を遣し減し不申候而ハ不相成候、小身之面々迄も如此相成候故ニ御当家山村・千村・毛利・志水・渡邊・石河家之外ハ譜代相勤候者ハ先は無之候、外大名衆国主勿論小身之衆中も先は無禄ニ而実子無之養子家督致し候而も先は減少なし、親之通りニ給候、親勤も無之者とても貳百石之高ニ而僅貳拾石歟三十石減候事ニ而格別之事ハ無之、現米取も右同断ニ候、御当地之儀者四拾石ニ五人分給候小十人組頭など病死ニ而養子ニ候へは四人分ニ相成候、其上ニ屋鋪も上り候故、四人分之内にて借家賃も出し不申候而ハ不相成、兄弟多き者ハとんと致方もなく出家に致たり、或ハ他家へ奉公ニ出し候、或ハ貳人分又ハ御金三両と被下候故ニ御家中奉公も不相成、様々之内職を致し、或ハ扇子之骨を拵、又は仏

具を彫立渡世仕候、内証へ立入候而ハ目も当られぬ事ニ而、小十人御歩行之類之跡御れんみむ之分ハ誠ニ御足輕・御中間よりもはるかにおとり申候、内証至而迫り候、此故ニ心ニ不思不都合も無余儀いたし候、諺に申候貧之盜ニ御座候、四十石ニ五人分にてハ御切米御扶持方合テ四拾九石ニ候、父相果四人分被下候へ者四十壺石八斗之減少ニ成、其上屋鋪も御取上ケ故ニ是非借宅を借り不申候而者難成、近年ハ借家流行候故ニ追々家賃を引上げ、何程狭き所ニ而も一月五百・六百文ならてハ借し不申候、其迄其所之懸り物も多く候故ニ容易之事ニ而ハ一ヶ月も難凌、昼夜様々之内職をいたし難儀暮しを仕候、十五歳程より廿四才までハ武芸稽古減候へ共、中々武芸之事ハ物置、今日を送り兼候、多く之御れんみん取候面々先ハ小十人・御徒之類ニ而御座候処、小十人ノ類ハ上之御側近き歩士ニ而、非常之時ハ御牀几本之御立固の一ツにて、或ハ御軍用ニ無之候而も常々の御道中ニ而も御座之間近辺之御固も仕候事、旁以何芸よりも武芸ニ達し候様ニ御無禄も可有之候御儀畢竟 上を御大切ニ被遊候基ニ奉存候、然るに右ニ申上候様ニわつか三人分・四人分、事ニ寄二人分、或ハ金三兩と申様ニ御憐みむ被下候故ニ、其日を送り兼内職計を仕、手ニ覚へ有之者は壺人も出来不仕候、是程之歎ケ敷事者無之候、ケ様成事も私式申上候も恐入候得共、小十人組之倅ハ直ニ父相果候ハ、小十人ニ被 召出、御歩行も其通りニ被 召出候ハ、相応武芸習非常之御用ニも相立可申候

(朱書)

「御家中現米取難儀之事」

一御知行取之者ハ家督無相違屋鋪共ニ被下候事ゆゑに父相果候而も先ハ流浪も不仕候へ共、現米取之者之かなしきは七拾石取候ものも直ニ御扶持方ニ成、前件申上候様ニ

四十石ニ五人分之跡四十壺石八斗減候様成事ニ而、父におくれて歎悲、其上ニ減少ニ成て歎悲、家屋鋪ニ離れて歎悲、母兄弟無是非遠き親類江預ケ分れ／＼ニ成て難悲、父より伝候諸道具も無是非売払歎悲、中々申上る迄も無之候、他所ニハ如此事ハ不承候、可成御儀ニも候ハ、右ニ申上候様ニ成、四拾石五人分も給候者之跡養子にて、其養子も幼少に而も、或常々五十人並ニ拾八石・拾五石に三人分も被下置、或ハ小十人組も病死後末期養子ニ而も、是迄十八石三人分之者八十石ニ三人分も被下置候ハ、其御厚恩何れ忘可申候哉、夫程被下候へは次第ニ成人仕候而も武文之芸能も仕込易く、風巾を作り扇子之骨をも削不申候而も随分母兄弟も渡世相成候、御足輕・手代之類ハ子供多きハ皆屋鋪方へ奉公ニ出し、御中間共之倅も二男も十二・三ニも成候へハ直ニ御中間ニ為相済候故、内へのおめ親子三人勤ニ而御扶持方も三人分も入、其上ニ御切米も親ハ四石五斗、二人之子供壺兩三分ツ、も取候故ニ、八・九兩ニ三人分ゆゑ、楽々と立羽ニ暮申候、其上ニ御足輕・御中間ハ農業も仕候故ニ取入物も多く、家も被下、家も有之候而、名こそ御足輕・御中間ニ候へとも存外内証ハ宜敷候、只難儀至極ニ見へ候ハ小十人・御歩行之類之跡御憐愍に御座候、右之通困窮ニ而武芸稽古可致年頃ニ而も内職計ニ打懸り渡世ニ追れ候故、成人之後小十人・御歩行ニ被 召出候而も手ニ覚有之候者ハ先ハ稀ニ候、此所ハ御軍用ニ関候御役人方厚御勘考有度御儀ニ奉存候

(朱書)

「士以上之武芸難行届候事」

一可相成御儀ニ候ハ、右之様成御憐愍取も相止、相応に幼少ニ而も御扶持・御切米被下、東向其外空地も多く候へハ御長屋ニ而も御立被成、家屋敷無者へ御借被遊候ハ、誠ニ御慈悲之一筋ニ優候事ハ有之間敷

候、尤其者へ之御慈悲計ニ無之、畢竟大きく申上候ハ、上之御大事之時之御用可立基を拵置候いたし方ニ候、前ニ申上候通り手代・御足輕・御中間ハ家屋鋪被下候而勤前も十二・三にも成候へハ前髪を取、見習ニ出し候様ニと仕候事故、何れも親子勤多く、身代も相応ニ宜敷候、五十人・御歩行之類之様ニ難儀をいたし候者ハ無之候、其上五十人・御歩行ハ士之儀故農業もならず、二男・三男御家中へも出しかたく困り入たる事ニ候、御軍用之第一士程重き事ハ無御座候、此故ニ他所ニ而ハ士以上之者之名跡之潰候事ハ曾而無之候、然るに御当地においてハ前件之通り故ニ、若死も打続候へは誠ニ蚩々と相成申候、御軍用一大事之儀ニ候へは御心得有へき儀ニ奉存候、既ニ大事之籠城、或九死一生之闘をなさんとならハ常々備立にてハ足輕・中間之類足手纏ひになりて突戦之邪魔に成故、士計すくりて将之馬之前後ニ立、只一文字に乗込より外ニ者無之候、慶長之関ヶ原之時大谷刑部討死と定、士計擇て六百人馬之前後左右ニ立テ我盲目故ニ銘々之顔も不見、心有士ハ聲なりとも聞度候間馬之前ニ来り名をなのり呉よといはれしニ、六百人之士壺人も不殘馬之前ニ而姓名を云、直に討死にせしなり、士之心と手代・足輕之類之心とハ雲泥の異なるもの也、然し大勢之中ニハ志之者も有者なれば一様ニハ言ひかたけれとも、先ハ小身ニ而も士之志ハ格別之物ニ候、然るニ右之通りニ成行候事御軍用之為ニハ不宜こと最上ニ候、愚意ニ奉存候二者、御当地御軍用相勤候輩も只一枚紙之御人数立之事計ニ成、肝心之其御備之貫め之輕重之事ニ心付候輩無之候、御軍用を勤るものハ能此事を察し不申候而者難成候、備之貫め之重きと申候者、士ハ武芸を能いたし、足輕ハ射打を能いたし、中間ハ長柄を能遣ひ、物頭・物奉行ハ其役めノ事能心得、侍大将ハ一備之人数必統て臨機応変能図にあたる

ことくなるなり、備之貫め輕きハ其裏はるや此所ニ心付不申一枚紙之の絵図にて濟事ニ存候事歎敷事ニ候、御軍用をも相勤候者ハ昼夜心配をして実におもひ入、上之御大事を奉存実ニ御間ニ合申候様ニ可致要用ニ候、数多申候事に候へ共、孫子經之五事を<道天地将法>以すと有之、注ニ經有常也と申候而、軍之事ハ常ニ能いたし置されは異変之時之間ニあはぬと申事ニ候、常を能致不申候而軍に勝へきいはれ曾而以無之事ニ候、士之子供も幼少ニ而父ニ離レ難儀を可致を御救被下置候ハ、其御恩可忘候哉、古より恩にかんじ一命を投打候事数々有之候、父相果候而も母兄弟別々ニ離別不仕候様ニ御救被下置候ハ、成人之後急度御軍用ニも相立可申候

一近頃ハ手代之類より追々昇進之者御政務之筋にも関り候故ニ候哉、とかく御家之御人数之減候を氣之毒に不奉存、御家中之出高之少も減候様ニと仕候事上之御利益と心得候故か、御大家ニ有間敷鎖細なる事も不被下候様ニ成、或ハ先達而も野崎清右衛門組一組御暇ニ相成候へ共、其跡も夫形ニ相成候、是何故候哉、御軍用之大事を知らぬ者之只寐ても覚ても雙露盤ニ懸り候者ニ御任せ候故ニ候、すは異変と申ニ成候ハ、何を頼と可被遊候哉、大勢之士之外ニ頼と被遊候者者無之候、此故ニ常々士を能御あひしらい不被成候而ハ其時之間ニ合不申候、昔異国之王鶴を愛して鶴に知行をやられ士を不被愛候へハ出軍之時ニ至り鶴を備に立て可被出と申候事有、又古書ニ戰士貧く遊士富ものは衰ふと有之候、戰士ハ闘をなす士、遊士ハ国家之役ニ立ぬ技芸をなして大名歴々之氣ニ入寵愛を受て大身ニなる者なり、此故ニ肝心之能戦ふ士ニ者ろくノ知行もやらず、難儀も不救、何之益も無之鼓打や笛吹・舞之大夫ニ過分之知行をやれば、必士之心主人之心と離レノニ成て其家も衰

へると也、近頃ハ御家中之人氣も困窮より
心離ル方様子ニ見え、其上明倫堂御取立後
は尚更武芸ハ自と用られぬ様ニ成、武之鋒
先之にふり候様成此風ニ成行候、御当地之
御武備之衰へ候事ハ御家計ニあらず、天下
へかゝはり候御事ニも奉存候へ者專御勘考
有度候